

異

中世ヨーロッパの夢と幻想

ハワード・ロリン・パッチ

黒瀬 保・池上忠弘・小田卓爾・迫 和子——共訳

界



THE OTHER WORLD

THE OTHER WORLD

According to Descriptions in Medieval Literature

by Howard Rollin Patch

Originally published by Harvard University Press

in 1950

訳者のことば

古代・中世思想から近代思想への推移に伴う文芸における修辞の変遷と、そうした変化の断層をこえる連続性の問題を思索し続けたわたしにとって、心の糧となる豊富な知識を与え、進むべき道を示唆してくれた過去の研究者の一人にH・R・パッチがいる。一九七〇年ごろには、古稀をこえる夫人のヘレン・K・パッチ女史がボストン市近郊の閑静な町ウエズレーの祖先からの邸宅にいて、生前の彼のことを書簡を通して色々と伺い知ることができた。祖先はアメリカ独立宣言署名者の一員であるという。彼は夫人とともに遠い中世の世界を憧れ、また遙かなる東洋に想いを馳せていたらしい。そしてわたしの知る夫人は茶華道に通じ、東洋の友人と親しく時局を談論することを好む人であった。しかし、パッチの生涯に関しては、実のところ、彼がスミス・カレッジというボストン市名門の女子学寮で教鞭を取ったということ以外には、細かいことはあまり知らない。だが、学風に関しては、ギリシア・ラテン・古期フランス語・スペイン語・ドイツ語・北欧語などの多彩な言語に精通する優れた中世学者であり、ヨーロッパ文学を見るための究極的には東洋思想にさかのぼる幾つかの新しい見方を開発した、最近学会で話題になってきている「観念の歴史学派」の先駆者であると言ってよい。

パッチの研究の足跡をたどると、一九二七年『中世文学における運命の女神』（ハーヴァード大学出版局）、一九三五年『ボエティウスの伝統』（オクスフォード大学出版局）、一九三九年『チョーサー再読』（ハーヴァード大学出版局）、一九五〇年『異界』（ハーヴァード大学出版局）の四篇の大著のほか、多数の論文がある。いずれも魅力的であ

り、古代宗教と哲学思想を背景とした文芸における寓意の伝統を扱ったものであるが、このうち運命論の領域に関しては、すでにわたしが独自の立場から幾つかの研究を公表し、パッチの示す重要事項を、研究範囲を限定したイギリス文学の枠内で視点を変えた立場から扱っている。しかし、彼の著書を通して、また夫人との文通を通して薫陶をたまり、研究の指針をたまたわったわたしとして、パッチの学風を翻訳の形でそのままが国に伝えることは、長年の夢であり、ここに協力者の力を得て、東洋思想との関係が特に顕著な彼の著書『異界』を訳出紹介することは、かねてからの念願の遂行であるとともに、パッチ夫妻の御恩義に報いるわたしの当然の義務と心得る次第である。

本書が表題として掲げた「異界」なる訳語について私見を述べると、原語のジ・アザー・ワールドなる英語は、「来世」のほかにも「彼岸」、「冥界」、「冥府」、「黄泉^{よみ}の国」、「別世界」、「天国」、「極楽」、「浄土」などの種々の訳語が考えられ、また原著の扱う内容が必ずしも死後の世界のみに限定されず、現実の世界で人々の夢見る理想の楽園をも含むことは事実である。しかし、東洋のわれわれの感覚に最も親しみやすい言葉は、やはり「来世」であり、また多くの英和辞典に共通する一般的訳語も「来世」になっているので、死後において訪れる楽園という觀念がすべてに勝る内容をなす事実をも踏まえて、あえて本文では「異界」に統一することはせず、適宜「来世」「冥府」「別世界」「異界」等訳し分けた。

本文中、「」に入れた訳は、一見くつかえしのように見え、くどいかもしいないが、そのほとんどが原語からの引用を訳出したものである。もっとも苦勞した部分である。

本書の原題は、ある意味で欧米人の世界（宇宙）観、人生観を文学を通して如実に表出しているかもしれない。とくに、彼らの現世に対する強い意識が逆説的に感じとられる。中世ヨーロッパ人の現実世界をぐるりと取りかこんでいる別の世界。おそらく彼らはそのような世界の实在——時空を超え、天上、地下、過去、未来など周囲のあちこちにある違った世界を実感し、実際に存在しているものと考えていたことだろう。そうでなければ、これほど具体的な

記述はできなかったであろう。

翻訳作業のあとを振り返ってみると、インド、ペルシア、バビロニア、エジプトなどの東方文化、アイスランド、アイルランド、スウェーデンなどの北欧文化、ゲルマン文化、ヘレニズム文化、ヘブライ文化などのすべてを概観統括した原著の訳出には多くの参考文献の整備を迫られ、万全を期するにはとうてい至らなかった。それぞれの分野の専門研究者の援助を仰ぐこともしばしばであり、特に古期北欧語の発音表記法については、広島大学教授谷口幸男氏から惜しめない助言と忠告をたまわり、古期フランス詩の解説に当たっては西南学院大学の同僚である富盛伸夫氏から貴重な示唆をたまわった。数名の知人からスペイン語について仰いだ援助も忘れがたく、これらすべての方々に対して厚く感謝の意を捧げる次第である。しかし、パッチが絶大なる精力を投入した文献調査の跡を物語る豊富な脚注の扱いに関しては、紹介を旨とした訳書の性格や、出版事業の目的などを考慮するとともに、複雑さを避け、読みやすく親しみやすい訳書作成の意図に添って、簡略化せざるを得なかった。引用した文献について特に関心をもつ読者諸氏については、原著の脚注を参照していただきたい。翻訳作業の分担に関しては、はしがき・序論より第五章までと結論を黒瀬・迫、第六章・第七章を池上・小田が分担した。

終りにのぞみ、本書の翻訳を認可されたH・R・パッチ・ジュニアに謝意を表するとともに、かつての広島における学舎で薫陶と研究指導をたまわった恩師山本忠雄、梶井迪夫両先生、さらに故厨川文夫先生に厚く御礼申し上げる次第である。願わくばこの訳書が、専門研究者にとり、また一般読者にとり、楽しい夢の世界の物語とならんことを祈る。

訳者を代表して 黒瀬 保

はしがき

かつてある紙面に研究成果の公表をゆるされた試論的論述を拡充し、当時の壁を破る全研究分野を取り扱うという、かねてからの約束を果たすべく本書の出版は計画された。しかし課題の達成が筆者ひとりの力では無理なことは当初から明らかであった。単に方法論を呈示し、素材の収集範囲を知らせるだけの、言わば研究序説のみが実現可能となった。しかし幸いにも本書が懸案としていたある種の疑問の解消に成功を収め、加えて本来の分野のみならず、他の研究分野にも適応可能な分析方法を呈示し得れば、もって筆者の欣快とするところである。

本書の中で生じる解説方法の経緯を指摘すると、はじめの数章では、これまでの研究者の業績を要約した論説を掲げた。もっとも、紙面のゆるす限り、必要な原典参照は怠らなかつたつもりである。次に、夢の文学の章では、説話ごとに梗概をくまなく解説したが、その後の章の梗概については、特に世間に流布したものの場合、略記するだけに記述をとどめた。また、ロマンス文学の分野では、物語の筋の構成の類似性、あるいは主題形式の類似性が、しばしば説話系統化の原理となった。しかし、従来の研究者により繰り返し扱われた説話に関する筋の分析は、ここで改めて検討しなおす必要を認めなかつた。本書に掲げた結論の多くは試論的である。別の研究方法を採用してもよければ、さらに進んだ研究の光を当てることもゆるされる。それにしても、アーサー王伝説の系譜に入ると、人をうらむ呪詛や打ち首の記述の頻出に筆者はしばしば肝を冷した。どの見解を定説とすべきかについての意見が定まらない場合、筆者はつとめて特殊な見方の採択を避けたつもりである。

多くの先覚者の努力なしには本研究の達成は望むべくもなかった。道を開いたすべての研究者の恩恵を記述し尽すことは不可能である。しかし、脚注において適切な言及を行わず、しかも本研究の推進に当たり絶大な援助をたまった研究者に謝意を表すことは、筆者のよるこびとする当然の義務と心得る次第である。古典部門の草稿を読み、有意義な示唆をたまわったアグネス・C・ヴォーン教授、夢の文学の章を精査されたエリナー・S・ダケット教授、独文学の章での助言をいただいたハーヴァード大学教授フランシス・P・マグリーン・ジュニア、ケルト文献の調査に当たり多大の援助をたまわったケネス・ジャクソンおよびフレッド・N・ロビンソンの、ハーヴァード大学両教授、ロマンズ文学について指導をたまわったコロンビア大学教授ロージャー・S・ルーミスおよびルーミス夫人に、それぞれ厚く謝意を表する。スミス大学教授エドナ・ウィリアムズ女史には本書の体裁について細心の配慮をいただき、彼女の忠告は、ほとんどすべて活用させていただいた。しかし最大の恩誼は、数度にわたり原稿を精査し、博識と造詣とをもって限らない教示をたまわったカリフォルニア大学教授アーチャー・テイラー氏に負うものである。かりそめにも本書に長所を認め得るならば、それはこれら諸氏の絶大な支援の賜であり、欠簡についての責は、すべて筆者の負うべきものと、筆者はとりわけテイラー氏とともに申し述べる次第である。

ジェイムズ・ヒルトン作『失われた地平線』の一部引用を許可されたウィリアム・モロウ社に対し、筆者の論文転載を認可されたジョンズ・ホプキンス大学出版局ならびにケンプ・マローン教授記念論文集の編集者に対し、またオードンの詩数行の引用を認可されたランダム・ハウス社に対し、いずれも深甚の感謝を捧げる。クロスおよびスローパー共著『古代アイルランド物語集』、ならびにエリナー・S・ダケット著『五世紀ラテン作家集』の引用例はホルト社の許可による。ホランダー訳『古代北欧詩集』の訳文引用についてはコロンビア大学出版局の許可を得た。ホランダー教授はテキサス大学に対し、すすんで英訳『散文エッダ』の使用を認められ、またブロージャー教授には『散文エッダ』訳の引用許可の恩恵にあずかった。滞りなく進行了た研究作業はカリフォルニア大学図書館およびハーヴ

アード大学図書館の寛大な処遇に負うものである。重要文献参照に当たっては、図書館相互貸借制度の活用が再三にわたり苦難の道を切り開いた。スミス・カレッジ図書館員の援助もひとかたならず、おしめない好意は同大学の学生諸氏からもよせられた。

研究企画のすべてにわたり筆者と行動をとにし、学舎における本研究の最初の受講以来、長年にわたり脚注を調べ、内容の正確さと一貫性を図る労を惜しまなかった、かつての学生ゴードン・ポッター女史には衷心から謝意を表す。筆者とともに女史は、楫なき小舟に同乗し、幻の彼岸をあてもなくさまよい、岸辺の住人たちに「あれらだ、あれらだ」と叫ばれ、罵られた、あの苦しい体験には、女史といえども堪えがたい思いがしたのであろう。

ハワード・R・パッチ

マサチューセッツ州、ノーザンプトンにて

黒瀬 保くろせ・たもつ

大正一〇年愛媛県生まれ。広島文理科大学卒。文学博士。中世英文学専攻。鈴峯女子短期大学を経て現在西南学院大学教授。主著に『中世ヨーロッパ写本における運命の女神図像集』『Goddess Fortune in John Lydgate's Works』(以下三省堂)『運命の女神』(南雲堂)がある。

池上忠弘 いけみ・ただひろ

昭和七年東京生まれ。慶応義塾大学大学院文学研究科修士課程修了。中世英文学専攻。現在成城大学文学部教授。訳書に、ラングランド『農夫ビアズの幻想』(新泉社)、R・W・サザーン『中世の形成』(共訳、みすず書房)、著書として『The Lyfe of Ippomydon』(英文、成城大学英語モノグラフ)、共著として『イギリス文学史序説』(中教出版)がある。

小田卓爾 おだ・たくじ

昭和一五年神奈川県生まれ。慶応義塾大学大学院文学研究科修士課程修了。古英語・英語学専攻。現在慶応義塾大学文学部教授。訳書に、ダケット『アルフレッド大王』(新泉社)、著書に『古代英語謎詩用語索引』(英文、学書房)がある。

迫 和子 さこ・かずこ

西南学院大学大学院文学研究科修士課程修了。中世英文学専攻。現在、福岡女子短期大学非常勤講師。

異界——中世ヨーロッパの夢と幻想

一九八三年九月一日 第一刷発行

定価——三、八〇〇円

著者◎——Howard Rollin Patch (ハワード・ロリン・パッチ)

訳者◎——黒瀬 保・池上忠弘・小田卓爾・迫 和子

発行者——株式会社三省堂 代表者上野久徳

発行所——株式会社三省堂

101 東京都千代田区三崎町二-二二-一四

電話 編集(〇三)二三〇一九四一一

販売(〇三)二三〇一九四二二

振替口座 東京六一五四三〇〇

乱丁・落丁本はお取替えいたします。

Printed in Japan

異界——中世ヨーロッパの夢と幻想●目次

● 訳者のことば	1
----------	---

● はしがき	v
--------	---

● 序論	i
------	---

第一章 ● オリエントおよび西洋古典における神話の起源	7
-----------------------------	---

第二章 ● ケルト民族における異界	29
-------------------	----

第三章 ● ゲルマン神話	61
--------------	----

第四章 ● 夢の文学	85
------------	----

第五章 ● 楽園への旅
143

第六章 ● 寓意文学
187

第七章 ● ロマンズ
239

● 結論
317

● あとがき
324

● 注
326

● 索引
356

序論

人は、常に夢や空想の中で、憧れの神秘の国に異様な想いを馳せてきた。その国が、たとえ旅路困難を極めようと、心から訪れてみたいと願う楽土の形をとるにせよ、また過去の思い出、未来への夢であるにせよ、穢れない環境に恵まれた黄金時代の観念とか、理想郷とか、現世で積んだ善行のむくいとしての神々の恩寵のゆえに死後にたどりつく浄土の観念とかを、人は永く育んできた。現世からの逃避であるとか、本能的悦楽であるとかは問わない。想像の中から、現実の夢から、また、たぶん潜在意識の中から、人は祝福された者の住む島、地上の楽園、山の裡なるまだら服を着た笛吹き【ドイツ伝説。まだら服を着たヘメリンの笛吹きは、ねずみの襲来に困っていたヘメリンの町から、笛の妙音でその群のねずみを誘い出し、山の中に隠して、山頂の楽園、天空の神々の都、また地下や海底の王国を生み出してきた。】の国【出たてのウエッサー川に水死させたが、町から約束の金が渡されなかつたので、笛の音で町の子どもたちを誘い出して、コペンベルグと云ったところへ】、山頂の楽園、天空の神々の都、また地下や海底の王国を生み出してきた。このような国の記述は、あらゆる民族の文学にくまなく行きわたっている。

だが、このような記述が文学に見受けられる場合、究極的に、それらが神話の起源、突きつめて言えば、筆者が指摘するような異界描写の伝統にのみ由来するとは、必ずしも限らないのである。なぜなら、その種の記述には、筆者が行なった調査よりもさらに古い観念とか、諸種の記述に繰り返されて、伝来経路がまったく分からなくなったような、ある種の要素とかが作用しているかも知れないからである。近くても遠くても、起源についての決定的断定を下すことは危険なのである。本研究における筆者の意図は、イギリス・フランス・イタリア文学の中世部門の記録を調査し、寓意・ロマンス・教訓詩に描かれた異界の実例を発掘し、すべての実例の民話的背景の輪郭を突きとめること

ができるかどうかを確かめることにある。

この研究課題は別段目新しいものではない。その重要性は早くから認められ、これまでも多くの学者が研究に専念してきた。しかし彼らの業績による示唆と、現在分かっている資料のすべてを尽してみても、徹底的調査は望むべくもない。というのは、新しい資料が絶えず発見され、現在手許にある資料は今後に予測される資料とともに、それぞれの問題に関するさらに進んだ論説を必要とするに至るからであり、最終的出版は数巻にのぼる分量が見込まれるからである。現在利用できる資料の範囲から考えると、既知未知の資料を概観し、今後の研究者の調査活動の手引きとなるような信頼できる結論の芽をつくるのが賢明な方策である。

本書の異界解説を読めば、時としてその解説が通俗的知識を一步も抜け出さないのではあるまいかという疑問を生むかも知れない。たとえば、ある種のロマンスに描かれた丘の上の濠に囲まれた古城は、なるほど奇怪な冒険に胸を湧かせるものがある。しかしそれは、概して中世の城以上のなんらの特色をも示さないとも言えるのである。それだけを取り上げてみると、それは確かにその通りである。しかしこの種の調査の推進は、当面手がけている特殊問題にとつて、現存する実例がただそれだけなのかどうかを見極めるためには、やはり必要なのである。異界への種々の旅路をたどり終え、海底の、あるいは丘の裡なる黄泉の国々を訪れた後にこそ、われわれは、はじめて異界の特質を論じる資格が満たされる。マリ・ド・フランス【十二世紀後半のフランス女流詩人、おそらく英国に在住した】の詩において、ラウンファル【アーサー王の騎士の一人、聖杯探求に出かける】が川を渡り、あるいはチョーサー【十三四〇一四〇〇の代表的詩人】が鷲につかまり〈名声の館〉の塔にのぼった体験を知り得た後にこそ、われわれは疑いもなく彼ら二人とともに今論じている神秘の国に旅をしたことになる。そしてこの種の事実は、必要とあらば、枚挙に暇がない。しかも、この種の調査からは、それらの要素が取材された神話における究極的出典への抜け目のない推理臆測でさえも遙かにおよばない、動かない何らかの事実を、われわれは引き出すことができる。きよう。

過去の記録に繰り返されて定着するに至った来世観を、人類はこれまでに、夢・幻・「真実の示現」などの形で表現してきた。それらの記述の解説には、単なる心理的符合を超える何らかの説明原理の設定が必要である。既に述べたように、異界への道は、おそらく井戸から降りる地下、または海底に通じている。それはまた人跡絶えた荒野の小径、天空への飛翔による場合もある。時には水濤・川・海などの障害が認められるが、そのような場合、異界の領域は通常孤島、あるいは群島に所在する。異界はまた、丘や山の裡、山頂に位置することもある。したがって、異界を求める旅行者の行く手は、あらゆる難所で遮られる。研究者の責務は、同種の障害の他の記録における再現と、後期文学への存続の系譜を確かめることにあり、また逆にその障害がまったくその場かぎりの偶然的産物であるかどうかを調査することにある。

周辺と同様に、異界そのものの特質研究もまた重要である。異界には通常一つ、あるいは幾つかの泉の湧く園を見かける。そしてその園には枝もたわなに果実が実る素晴らしい樹木が生い茂っている。えも言われぬ香りが大地に満ち、鳥はこよなき音をさえずる。亭・館・城・宮殿・園・宮殿を飾る宝石・楽の音・水晶の建物・果実を食べた効能、そして異界を訪れた期間の、信じられないほど長い、あるいは短い時の経過など、馴染み深い特質はいろいろある。耳よりな由来も稀には聞くが、これらの特質の多くは、実は、月並みなものである。そしてそれらの特質を文学の舞台にのぼらせる楽屋裏を的確に示すのは、一種の規範にしたがって繰り返される特質の配合様式である。したがって実例の列挙は、異界描写の発達過程を物語る諸種の規範を表示するのに極めて有効である。いわば古代の神話において、諸種の記録に共通する異界描写の下図を読みとる時にこそ、異界に関する特殊描写の発端がそこにあるとの推論が可能になると言ってもよい。しかし銘記すべきは、繰り返し述べるように、研究成果がたとえどうあろうとも、結論に価値があるのではないということだ。程度の差こそあれ、結論は仮説にとどまらなければならず、また、それは素材の範囲と種類を明示し、関連性を持つ同種の記述の見取り図の作成に役立つだけにとどまるべきである。

初めの数章は、東方・^{オリエント}西洋古典、ケルト・ゲルマンなどの古代神話に見られる異界の主要特質を記述する。次いで、神話研究の結果解明された事実に基づく異界描写展開の考察を、中世ヨーロッパ文学を通して実践し、異界描写の象徴性を探究する。疑いもなく、本書を読めば、たとえ、夢・念願・天啓であったとしても、太陽の下に新奇なものはないという事実に気づくであろう。だが、よしそれが真実であるとしても、本書が帯びる独自の意義はやはり失われないのである。時には種々に異なる作者の個性を通して、また時には同じ素材を異なる観点から扱う作者の創造力と独自性を通し、結局何らかの斬新さが認められるというのが、少なくとも実例探索の魅力である。

かくして同じ島の描写についても、その島を訪れてイゾルデと出会ったトリスタンにおける場合と、アヴァロンへの旅の途中でその島に立ち寄ったアーサー王における場合とでは、島は異なる意味を帯びるのである。チヨースーの『名所の館』とダンテの『煉獄篇』とを比較すれば分かるように、同じ主題を扱ったものでも、神話的起源の伝承経路が異なれば、記述の意味は変化する。ダンテにおける山の描写は、地上の樂園とその所在に関する中世的觀念に由来するが、チヨースーの氷の岩の方は、おそらく一部にはニコル・ド・マルジヴァルの影響が感じられるものの、究極的にはそれは種々の寓意を通して伝承された聖なる山に関する通俗化した民話に端を発している。双方とも古代の種々の意味のある程度とどめるとともに、両者とも觀念の独自性の重要な特性を示している。

異界描写が神話的起源を忠実に、確実に、矛盾なく踏襲しているかどうか、それが現実の体験に基づくかどうか、異界は死後においてのみ達し得るものかどうか、あるいは所定の時代における異界の真の意味はどうあったか、というような疑問の解決は、本書において筆者の負うべき責務とは考えない。くずれ果てた神話の文芸的用法において、ほとんどすべて、描写の意味は変質しており、その昔意味を帯びた描写の形体的要素だけが、通常もとのままにとどまっている。ところで筆者は、筆者の研究領域を、あえて懂れの国、さらに言えば悲願の領域のみに制限した事実を、ここで断っておかねばならない。それゆえ、特殊な理由から本書の領域に関係を持つにあらざるかぎり、拷問

と懲罰の場所は本書からは除外した。もっとも、地獄は筆者が扱う数種の素材にとり、意義深い対応をなす場合があるから、たとえば『アエネイス』における地下への旅におけるように、地獄がエリジアの野とともに現われるような場合には、もちろん地獄への言及はなされている。天国へ昇るためには、魂は地獄を避けるべく、裁きの橋を渡らなければならぬと記した『聖者バトリックの煉獄伝』の挿話におけるように、地獄の記述が筆者にとって深い意味をもつこともある。しかし、おしなべて地獄はロマンスや寓意において筆者が扱う、あの神秘的にして魅惑的な国とは、およそ縁遠いものであるから、概して本書の記述からは除去されるに至っている。

最後に筆者は、現代における異界描写の展開は、本書の関知するところでないことを言明する。現代においては、千尋の海、月への飛行のみならず、顕微鏡や望遠鏡をのぞき見て、中世人が抱いた無法な夢の彼方の想像の国への冒険までも可能にする科学的発明と相俟って、不思議の国への旅は、ますます複雑化した内容を示す。しかし、筆者の考察する物語は、楫^{かじ}なき小舟のお伽の国への旅にせよ、天翔ける戦車にまたがる神の都への旅にせよ、あるいは地上の楽園を憧れる探検であるにせよ、それはたとえば、青春の泉【マンデヴィル旅行記が描いた青春】を憧れたかつての旅人たち【(一四六〇—一五二〇)はその一人】が、眼前に開ける新天地が見える「ダリエン」【カリブ海にあるパナマとコロンビアの中間の地域】の嶺に静かに【ギーツの詩『Looking into Channar's Home, the last of the Pacific』を見て人の感激を語る】立ったように、後の世の人の楽しい旅への道を開くと信じられるのである。